



大きく確保された210mmの最低地上高と、ラフロードをしっかり捉えるサスペンションセッティングにより、未舗装路でも安定感のある走りを実感できる



VOLVO V90クロスカントリー

北欧のラグジュアリー、北海道の自然と出会う

急な悪天候だからこそ
実感できた安心感と快適性

北欧はスウェーデンの雄、ボルボ。日本でのボルボのイメージは、強固に仕立てられたボディがもたらす安全性にあるが、実は柔軟性が求められるSUVを得意とするブランドでもある。

ここで紹介するV90クロスカントリーは、ボルボらしいおらかさと、SUVがもたらすゆとりをうまくバランスさせたモデルだ。そんなV90クロスカントリーらしさを堪能しようと北海道の道をドライブすることにした。

ドライブルートは、新千歳空港から函館までの300キロほど。この区間、最近では高速道路が延び、快適なドライブすることができるようになったが、残念なことには、走り出しから強い雨に見舞われてしまった。

そんな悪条件でのドライブでまず感じたのは、タイヤの接地面が豊かで、路面をしっかり捉えている感覚がしっかりと伝わってくる。ステアリングを操作すれば、強い雨の中でも、すっとノーズが向きを変えてくれる。さすがはボルボというべき安定感が、最初の印象だ。

さらに雨の道央道をひた走る。登別から室蘭までは海に近い場所もあるが、絶景を望めないのが残念だ。ゆるやかなワインディングロードで感じる乗り心地は、クロスカントリーシリーズらしいサスペンションのストローク量を生かした、ゆったりとしたもの。とくにリバウンドストロークにきめ細やかさがある。

内浦湾をなぞるようにさらに続く道央道を走っていると、2リッターガソリンエンジンに過給機ターボを加えたパワー

ユニットが存在感を増していく。シリーズにはその上の排気量のユニットも存在するが、ボルボならではのターボの扱いやすさもあり、むしろこれで十二分の力強さである。

あいかわらずの悪天候。良好ではない視界状況のなか、全車速度追従機能付ACCに追加された車線維持支援機能パイロットアシストII（最新世代）によるドライビングを試してみた。

この機能は走行中、車線の中央を走るように自動的にステアリングを修正するもの。実際に作動させてみると、先行車の加減速にはゆとりをもって対応する印象で、無理矢理に追従するような感覚はない。乗員の快適性を重視したセッティングなのだ。ステアリング操舵アシストは、進化の過程にあることを感じさせる技術ではあるが、やがて来たる自動運転に求める理想をみた気がした。

ようやく雨が弱まってきたのは、大沼に着いたころ。下道からちょっとしたラフロードへと足を踏み入れてみると、サスペンションを伸ばして路面をしっかりと捉え、生半可なSUVにはない力強い走りを見せる。AWDであることも手伝ってか、ラフロードでの乗り心地の良さ、素直なハンドリングには特筆すべきものがある。

悪条件でのドライブだからこそ、V90クロスカントリーの真価が見えてきた。ひとこと言うなら、ボルボ伝統の安心感をベースに構築された、SUVならではの快適性。見せかけだけでない、本当のラグジュアリーを味わえるクルマであるということ。近ごろ流行のグランピングリゾートのような場所にこそふさわしい、真のSUVといえるだろう。

ボルボ V90クロスカントリー T5 AWD Sumnum
 価格:7,540,000円(税込)
 ボディサイズ:全長4940mm×全幅1905mm×全高1545mm
 車両重量1870kg
 (チルトアップ機構付電動パノラマ・ガラス・サンルーフ装着車)
 パワーユニット:直4/1968ccターボガソリンエンジン
 JC08モード燃費:12.9km/L 乗車定員:5人
 [問い合わせ]ボルボ・フリーダイヤル ☎ 0120-55-8500



右/ラゲッジルーム容量は560~1525Lと大容量。ハンズフリー機構つきのパワーテールゲートや電動ラゲッジカバーなど、実用性優先の装備で使い勝手が良い。左/多機能ながら、スイッチ類が少なく、シンプルなデザインのインパネ。左ページ/最低地上高210mmながら一般的な立体駐車場の制限とされる全高1545mmに抑えたスタイリッシュなスタイリング。ボディプロテクションがSUVらしさをアピールする



スマートSUVで
3倍広がる
ライフスタイル